

## 研究プロジェクト総合報告

## 化粧行動の基本的構造の探索

諸井 克英

同志社女子大学  
生活科学部・人間生活学科  
教授

板垣 美穂

同志社女子大学大学院  
生活科学研究科・生活デザイン専攻  
2012年度修了

## I. 問題

前研究(板垣・諸井, 2012)では, 日常的化粧度の測定において「大学」と「遊び」という2場面を想定し, それぞれの場面で化粧をどの程度行うかどうかを尋ねた。いずれの状況でも化粧をよく行う方向に回答が大きく偏るという結果が得られた。つまり, 4点尺度上で「4. 必ず化粧をする」を選択した者が多かった。しかしながら, この測定方法に基づくと, 「4. 必ず化粧をする」という選択肢は全体として濃厚な化粧をしていることを必ずしも意味しない。つまり, 特定の部分にしか化粧を施していない者も, 「4. 必ず化粧をする」という選択肢を選ぶ可能性がある。そのために, 前研究では「大学」あるいは「遊び」のいずれの状況でも化粧行動を活発に営んでいると解釈可能な偏りが現れたと推測できる。そこで, 一般的な設問ではなく, 実際にどのような化粧を営んでいるかを緻密に測定する必要がある。

これらの点を踏まえて, 本研究では, 前研究で設けた日常的化粧度の設問に加え, 顔全体あるいは特定の部分における化粧の程度を緻密に測定することにした。これによって, 化粧行動のパターンを抽出し, 一般的な日常的化粧度に関する回答との対応を検討する。このために, 女子大学生を対象とした質問紙調査を実施した。

## II. 方法

## 1. 質問紙の実施と対象

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用して, 質問紙調査を実施した(2011年12月1・5日)。回答にあたっては匿名性を保証し, 実施後に調査目的と研究上の意義を簡潔に説明した。青年期の範囲を逸脱している者(25歳以上)を除き, 以下の尺度に完全回答した女子学生352名を分析対象とした(1回生118名, 2回生93名, 3回生125名, 4回生16名)。回答者の平均年齢は19.91歳( $SD = 1.18$ , 18~24歳)であった。

## 2. 質問紙の構成

質問紙は, 回答者の基本的属性に加え, ①化粧行動尺度, ②日常的化粧度に関する設問, ③対異性不安尺度, ④化粧リスク懸念尺度から構成されている。なお, ③と④の結果については本論文では取り扱わない。

## (1) 化粧行動尺度

日常生活における回答者自身の「化粧」の様子を緻密に測定した。以下のようにして尺度項目が作成された。まず, 具体的な化粧の種類・用途をインターネットで探索し, 考えられる限りの化粧行動項目リストを構成した。その上で, 同種類の化粧を整理・統合した。次に, ①顔全体のスキンケア, ②顔全体の化粧, ③眉毛, ④目元, ⑤鼻, ⑥口, ⑦頬の7つに項目を分類し, 点検した。以上の作業を経て, 最終的に39項目から成る「化粧行動尺度」を作成した(Table 1参照)。

Table 1 化粧行動尺度における各項目の評定値分布

	平均値	対応のある t検定 (a)	標準偏差 (b)	1. まったく行 わなかった	2. どちらかと いえば行わ なかった	3. どちらかと いえば行っ た	4. かならず 行った	
makeup_a_1 顔の産毛処理	2.56		0.98	74	58	168	52	m
makeup_a_2 洗顔石鹸 (固形・フォーム・泡・パウダー)	3.70	>3.5	0.72	14	12	39	287	
makeup_a_3 化粧水	3.76	>3.5	0.58	6	9	47	290	
makeup_a_4 乳液	3.11		1.16	63	32	61	196	m
makeup_a_5 保湿クリーム	2.44		1.27	129	51	60	112	m
makeup_a_6 美容液	2.26		1.22	143	58	67	84	m
makeup_a_7 パックマスク	1.80		0.93	183	64	96	9	m
makeup_a_8 顔マッサージ	2.02		1.04	155	66	99	32	m
makeup_a_9 UV・日焼け止めクリーム	2.35		1.19	129	49	95	79	m
makeup_b_1 化粧下地	3.26		1.05	43	29	72	208	n
makeup_b_2 コントロールカラー	1.50	≒ 1.5	0.91	254	45	29	24	l
makeup_b_3 コンシーラー	1.76		1.08	216	45	50	41	m
makeup_b_4 ファンデーション (リキッド・クリーム・パウダー・スティック・ウォーターブルーフ)	3.20		1.13	56	26	61	209	n
makeup_b_5 白粉=フェイスパウダー (ルース [粉末状]・プレスト [固形状]・ルーセント [無色・白色])	2.28		1.29	160	30	64	98	m
makeup_b_6 BBクリーム (Blemish Balm Cream)	2.03		1.22	189	32	64	67	m
makeup_b_7 ハイライト (パウダー [ルース・プレスト]・リキッド [筆ペン式]・クリーム)	1.74		1.08	223	35	56	38	m
makeup_b_8 化粧くずれ・テカリ防止スプレー	1.30	<1.5	0.69	284	38	22	8	
makeup_b_9 眉の整え (カミソリ・毛抜き・眉ハサミ・テンプレート・ブラシ)	3.38		0.68	8	16	164	164	n
makeup_b_10 アイブロウ (ペンシル・パウダー・マスカラ・リキッド)	3.12		1.18	67	25	60	200	m
makeup_b_11 アイブロウコート	1.41	<1.5	0.88	277	32	18	25	
makeup_c_1 まつ毛専用美容液	1.46	≒ 1.5	0.84	257	42	39	14	l
makeup_c_2 アイプチ・メザイク	1.57	≒ 1.5	1.03	259	24	32	37	l
makeup_c_3 アイシャドウ (パウダー [ルース・プレスト]・クリーム・ペンシル・ジェル)	3.29		0.99	37	26	87	202	n
makeup_c_4 アイライナー (ペンシル・クレヨン・リキッド・ジェル・パウダー)	3.04		1.14	60	39	79	174	m
makeup_c_5 ビューラー	2.89		1.21	83	29	83	157	m
makeup_c_6 マスカラ (下地・トップコート)	1.98		1.23	198	35	47	72	m
makeup_c_7 マスカラ (ロング・ボリューム・カラー・カール・フィルム・ウォーターブルーフ)	3.14		1.10	56	23	87	186	n
makeup_c_8 つけまつ毛 (上用)	1.56	≒ 1.5	1.00	253	34	32	33	l
makeup_c_9 つけまつ毛 (下用)	1.17	<1.5	0.60	318	18	5	11	
makeup_c_10 毛穴パック	1.41	≒ 1.5	0.72	254	55	40	3	l
makeup_c_11 Tゾーン専用下地	1.36	<1.5	0.87	291	20	15	26	
makeup_c_12 ノーズシャドウ	1.46	≒ 1.5	0.96	276	19	27	30	
makeup_d_1 リップクリーム	3.28		0.91	25	34	110	183	n
makeup_d_2 リップペンシル	1.18	<1.5	0.51	306	31	13	2	
makeup_d_3 口紅	1.79		1.04	202	54	64	32	m
makeup_d_4 リップグロス	2.18		1.06	129	72	110	41	m
makeup_d_5 唇用美容液	1.24	<1.5	0.62	300	24	24	4	
makeup_d_6 チーク (パウダー [ルース・プレスト]・クリーム)	3.33		0.97	36	19	90	207	n
makeup_d_7 シェーディング (パウダー・練り状)	1.52	≒ 1.5	0.94	255	36	36	25	l

N = 352 (a) : 対応のある t 検定 < 対 1.5; 対 3.5; p < .05 > (b) : SD < .600 濃い網掛け : 75% (N = 264) 以上  
薄い網掛け : 25% 以上で 2 値カテゴリーにした → 1 : (1 = 0) (2, 3, 4 = 1) ; m : (1, 2 = 0) (3, 4 = 1) ; n : (1, 2, 3 = 0) (4 = 1)

これらの項目それぞれについて、「ここ 1 カ月間」の「大学」へ行く時の様子を思い浮かべさせ、39 項目の化粧を行う程度をそれぞれ 4 点尺度で評定させた（「4. かならず行った」～「1. まったく行わなかった」）。なお、評定順の効果を相殺するために、評定用紙を頁単位（4 頁）でランダムに並び替えた。

(2) 日常的化粧度に関する設問

前研究 (板垣・諸井, 2012) と同様に、日常生活における回答者自身の「化粧」の様子を測定した。①「大学」に行く時と②休みの日に「遊び」に行く時のそれぞれの状況で「化粧」をして出かけるかどうかを全体的に回答させた (4 点尺度 : 「4. 必ず化粧をする」～「1. ほとんど化粧をしない」)。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 化粧行動の基本的構造

##### (1) 項目回答値の事前チェック

化粧行動 39 項目の平均平均値と標準偏差を検討した (Table 1)。平均値が 1.5 以下である項目が 13 項目あり, 3.5 以上である項目は 2 項目であった。次に, 39 項目の回答分布を吟味したところ (Table 1), 回答カテゴリーの分布に大きな偏りがある項目が認められた。たとえば, 「`makeup_a_2` 洗顔石鹸」や「`makeup_a_3` 化粧水」では「4. かならず行った」に, 「`makeup_d_2` リップペンシル」では「1. まったく行わなかった」に, それぞれ回答が大きく偏っていた。

化粧行動測度はもともと間隔測度として考えていたが, 2 値変量として扱うことにし, 以下の手続きで分析対象項目を選択した。

まず, 1 つの回答カテゴリーに 75% = 264 名 (352 名中) 以上の偏りがある項目を削除することにした。「`makeup_a_2` 洗顔石鹸」および「`makeup_a_3` 化粧水」では, 75% 以上が「4. かならず行った」と評定していた。他方, 75% 以上が「1. まったく行わなかった」と回答していた 7 項目も除くことにした (「`makeup_b_8` 化粧くずれ・テカリ防止スプレー」, 「`makeup_b_11` アイブロウコート」, 「`makeup_c_9` つけまつ毛 (下用)」, 「`makeup_c_11` Tゾーン専用下地」, 「`makeup_c_12` ノーズシャドウ」, 「`makeup_d_2` リップペンシル」, 「`makeup_d_5` 唇用美容液」)。

次に, 残り 30 項目を対象として, もとの 4 点尺度 (「4. かならず行った」～「1. まったく行わなかった」) から 2 点尺度 (「1=行った」, 「0=行わなかった」) へ変換を行った。2 点尺度化は, どちらかのカテゴリーが 25% = 88 名 (352 名中) 以上となるように調整した (Table 1 参照)。4 点尺度の「4. かならず行った」と「3. どちらかといえば行った」を 2 点尺度の「1 = 行った」とし, 4 点尺度の「2. どちらかとい

えば行わなかった」と「1. まったく行わなかった」を 2 点尺度の「0 = 行わなかった」と変換した項目は, 30 項目中 17 項目であった。

残りの 13 項目については, それぞれ以下のように変換した。13 項目中 7 項目は, 4 点尺度の「4. かならず行った」のみを 2 点尺度の「1 = 行った」とし, 4 点尺度の「3. どちらかといえば行った」と「2. どちらかといえば行わなかった」と「1. まったく行わなかった」を 2 点尺度の「0 = 行わなかった」と置き換えた。残りの 6 項目は, 4 点尺度の「4. かならず行った」と「3. どちらかといえば行った」と「2. どちらかといえば行わなかった」を 2 点尺度の「1 = 行った」とし, 4 点尺度の「1. まったく行わなかった」のみを 2 点尺度の「0 = 行わなかった」とした。これら 13 項目については, 「3. どちらかといえば行った」を「0 = 行わなかった」とし, 「2. どちらかといえば行わなかった」を「1 = 行った」と変換したことに注意しておく必要がある。

##### (2) クラスタ分析

上記のようにして 2 点尺度化した 30 項目を対象に, クラスタ分析を行った。Ward 法により, 2 値データの平均ユークリッド距離に基づく測定変数の分類を試みた。30 項目を対象としたクラスタ分析では 7 つの小クラスタが検出されたが, 6 項目が小クラスタを構成する他の項目と不整合であったため, これらの 6 項目を削除し再度分析を実施した。2 回目の分析では, 9 つの小クラスタが検出された。しかし, 2 項目が解釈不能であったので次の分析では削除した。

3 回目の分析での樹状図を検討すると, 9 つの小クラスタが抽出され, 各小クラスタの構成項目も一貫性が認められた。そこで, この 3 回目の 22 項目を対象としたクラスタ解を最終解とした (Fig. 1)。

9 つの小クラスタのそれぞれにおける構成項目は以下の通りである (makeup\_1～makeup\_9 と呼ぶ)。① makeup\_1 (「`makeup_b_1` 化粧下地」, 「`makeup_b_4` ファンデーション

ン], 「makeup\_d\_6 チーク」), ② makeup\_2 <「makeup\_c\_3 アイシャドウ」, 「makeup\_c\_7 マスカラ (ロング・ボリューム・カラー・カール・フィルム・ウォータープルーフ)」), ③ makeup\_3 <「makeup\_b\_10 アイブrou」, 「makeup\_c\_4 アイライナー」, 「makeup\_c\_5 ビューラー」), ④ makeup\_4 <「makeup\_c\_2 アイプチ・メザイク」, 「makeup\_c\_8 つけまつ毛 (上用)」), ⑤ makeup\_5 <「makeup\_b\_2 コントロールカラー」, 「makeup\_b\_7 ハイライト」, 「makeup\_b\_3 コンシーラー」), ⑥ makeup\_6 <「makeup\_d\_3 口紅」, 「makeup\_d\_4 リップグロス」), ⑦ makeup\_7 <「makeup\_a\_7 パックマスク」, 「makeup\_c\_10 毛穴パック」, 「makeup\_a\_8 顔マッサージ」), ⑧ makeup\_8 <「makeup\_a\_5 保湿クリーム」, 「makeup\_a\_6 美容液」), ⑨ makeup\_9 <「makeup\_b\_9 眉の整え」, 「makeup\_d\_1 リップクリーム」)。

樹状図 (Fig. 1) を見ると, 抽出された9つの小クラスターは, さらに大きな3つのクラ

スターから構成されていると分かる (これを第1クラスター~第3クラスターと呼ぶ)。第1クラスター (makeup\_1~makeup\_3) は, 外見的な変化を印象づける「アイメイク」を中心とした化粧が特徴であり, 外見的魅力や美意識の向上が期待されるような化粧行動のまとまりであると考えられる。他方, 第2クラスター (makeup\_4~makeup\_7) は, 自分の顔の欠点をカバーしたいという化粧が中心となる。第3クラスター (makeup\_8~makeup\_9) は, 肌の健康状態などを保つためのケアのまとまりである。第2クラスターと第3クラスターはさらに大きなクラスターとなり, ベースを補整していくような化粧行動と全体として解釈できる。

### (3) 多次元尺度解析

先のクラスター分析で最終的に残った22項目を対象に, 多次元尺度解析 (ALSCAL, 平方ユークリッド法) を行い, 2次元解 ( $Stress = .222$ ;  $RSQ = .818$ ) を抽出した (Table 2,

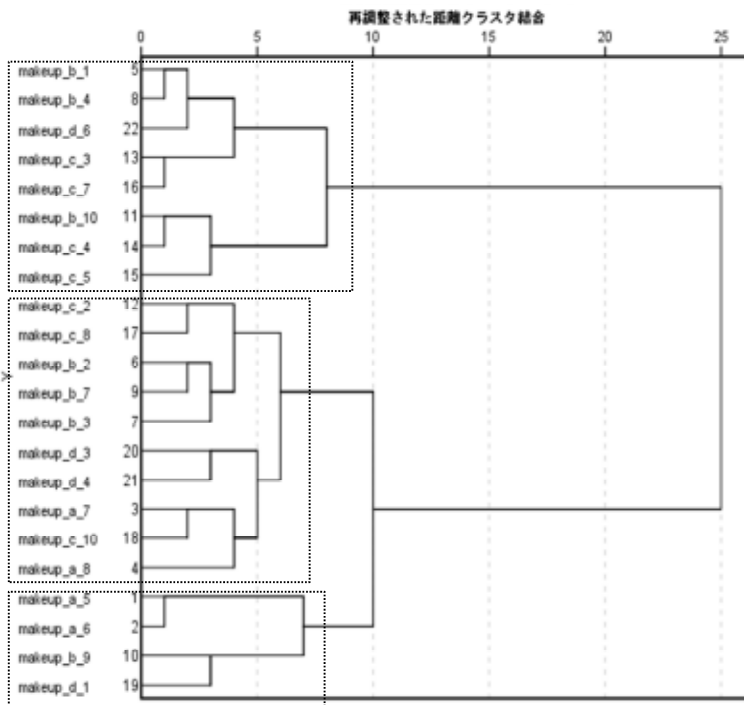


Fig. 1 化粧行動尺度に関するクラスター分析 (Ward法, 平均ユークリッド距離) の結果 - 3回目 -

Table 2 化粧行動に関する多次元尺度解析 (ALSCAL, 平方ユークリッド距離) の結果 - 2次元解 -

化粧行動項目	I	II
makeup_a_5 保湿クリーム	0.070	-1.239
makeup_a_6 美容液	0.382	-1.117
makeup_a_7 パックマスク	1.152	-0.317
makeup_a_8 顔マッサージ	0.942	-0.790
makeup_b_1 化粧下地	-1.249	0.259
makeup_b_2 コントロールカラー	1.640	0.308
makeup_b_3 コンシーラー	1.419	0.629
makeup_b_4 ファンデーション (リキッド・クリーム・パウダー・スティック・ウォータープルーフ)	-1.323	0.422
makeup_b_7 ハイライト (パウダー [ルース・プレスト]・リキッド [筆ペン式]・クリーム)	1.243	0.175
makeup_b_9 眉の整え (カミソリ・毛抜き・眉ハサミ・テンプレート・ブラシ)	-0.150	-1.333
makeup_b_10 アイブロウ (ペンシル・パウダー・マスカラ・リキッド)	-1.812	-0.258
makeup_c_2 アイプチ・メザイク	1.541	0.562
makeup_c_3 アイシャドウ (パウダー [ルース・プレスト]・クリーム・ペンシル・ジェル)	-1.235	0.378
makeup_c_4 アイライナー (ペンシル・クレヨン・リキッド・ジェル・パウダー)	-1.757	0.174
makeup_c_5 ビューラー	-1.842	-0.303
makeup_c_7 マスカラ (ロング・ボリューム・カラー・カール・フィルム・ウォータープルーフ)	-1.015	0.535
makeup_c_8 つけまつ毛 (上用)	1.135	0.833
makeup_c_10 毛穴パック	1.398	-0.151
makeup_d_1 リップクリーム	-0.412	-1.249
makeup_d_3 口紅	1.133	0.860
makeup_d_4 リップグロス	-0.120	0.963
makeup_d_6 チーク (パウダー [ルース・プレスト]・クリーム)	-1.137	0.657

$N = 352$  Stress = .222; RSQ = .818

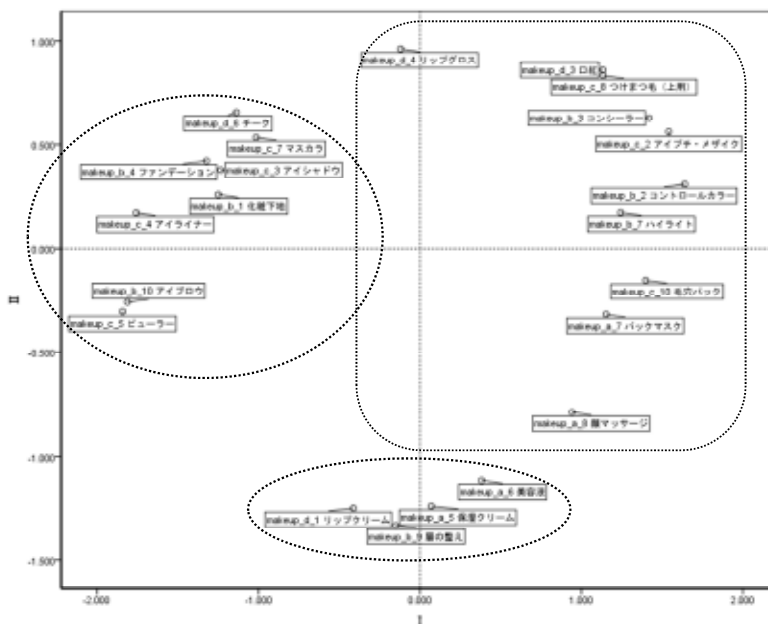


Fig. 2 化粧行動に関する多次元尺度解析 (ALSCAL, 平方ユークリッド法) の結果

Fig. 2)。第Ⅰ次元は、第1クラスター項目群が負方向に、第2クラスターと第3クラスター項目群が正方向にそれぞれ位置することから、「基礎補正－目元意識」の軸と解釈できる。第Ⅱ次元は、第3クラスター項目群が負方向に、第1クラスターと第2クラスターの項目群が正方向にそれぞれ固まっているので、「外見的顕示－下地処理」を表す軸と考えられる。ただし、*Stress* 値がやや高く、*RSQ* 値が .900 に達していないことから、この解の適切さに留意する必要がある。

#### (4) 小クラスター得点の算出

先のクラスター分析で得られた9小クラスターごとに構成項目の平均値を算出した (Table 3)。反復測定分散分析を用いて9個の平均値の比較を行ったところ、有意な効果が見いだされた。下位比較によると、*makeup\_1*～*makeup\_3* と他の平均値の間に有意な分離が認められた。つまり、外見的な魅力や美意識の向上が期待されるような第1クラスターに該当

Table 3 化粧行動におけるクラスター得点と信頼性係数

	Spearman-Brown の係数	平均値 *		標準偏差
<i>makeup_1</i>	.748	0.59	b	0.41
<i>makeup_2</i>	.733	0.55	bc	0.44
<i>makeup_3</i>	.526	0.71	a	0.33
<i>makeup_4</i>	.493	0.27	de	0.36
<i>makeup_5</i>	.438	0.27	e	0.31
<i>makeup_6</i>	.423	0.35	d	0.38
<i>makeup_7</i>	.459	0.32	de	0.33
<i>makeup_8</i>	.684	0.46	c	0.43
<i>makeup_9</i>	.467	0.49	c	0.40

(反復測定分散分析)

$F = 77.26$   $df = 6.90/2422.83$   $p = .001$

$N = 352$

\* : 異なる英文字は互いに有意に異なることを表す (Bonferroni の方法 ;  $p < .05$ )。

する化粧行動が相対的に活発に行われていることが示された。

## 2. 大学および遊びでの化粧度

### (1) 大学および遊びでの化粧度に関する回答分布

「大学」と「遊び」という2状況における化粧の程度の関連を見た (Table 4)。前研究 (板垣・諸井, 2012) と同様に、いずれの状況でも「化粧」をよく行う方向に回答が大きく偏る傾向が得られた。

### (2) 化粧行動小クラスター9得点との関係

化粧行動小クラスター9得点と「大学」および「遊び」での化粧度との間の関係をピアソン相関分析によって検討した (Table 5-a)。

Table 5-a 化粧行動と大学および遊びでの化粧度との関係－ピアソン相関－

	大学_化粧	遊び_化粧
<i>makeup_1</i>	.624 $p = .001$	.346 $p = .001$
<i>makeup_2</i>	.598 $p = .001$	.339 $p = .001$
<i>makeup_3</i>	.533 $p = .001$	.477 $p = .001$
<i>makeup_4</i>	.220 $p = .001$	.131 $p = .014$
<i>makeup_5</i>	.241 $p = .001$	.156 $p = .003$
<i>makeup_6</i>	.287 $p = .001$	.210 $p = .001$
<i>makeup_7</i>	.171 $p = .001$	.173 $p = .001$
<i>makeup_8</i>	.182 $p = .001$	.138 $p = .009$
<i>makeup_9</i>	.241 $p = .001$	.218 $p = .001$

$N = 352$

Table 4 「大学」と「遊び」での化粧度の関連

	遊び_化粧				合計
	1. ほとんど化粧をしない	2. どちらかといえば化粧をしない	3. どちらかといえば化粧をする	4. 必ず化粧をする	
大学_化粧					
1. ほとんど化粧をしない	7	3	7	5	22
2. どちらかといえば化粧をしない	0	2	7	15	24
3. どちらかといえば化粧をする	0	1	27	93	121
4. 必ず化粧をする	1	0	7	177	185
合計	8	6	48	290	352

すべての場合で「大学」および「遊び」での化粧度と化粧行動9得点との間に有意な正の相関値が得られた。とりわけ、「makeup\_7」を除き、「大学」での化粧度との相関値のほうが「遊び」場面よりも全体的に高かった。本研究では、化粧行動を詳細に尋ねる測度では回答者に「大学」へ行く時の様子を思い浮かべさせたので、この傾向は当然の結果である。

「大学」および「遊び」での化粧度ともに、化粧行動9得点のうち第1クラスターに含まれる「makeup\_1, 2, 3」の相関値は、他の2つのクラスターに該当する「makeup\_4, 5, 6, 7, 8, 9」の場合よりも、相対的に高かった。

さらに、「大学」での化粧度を従属変数とし、化粧行動9得点を説明変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を試みた（Table 5-b）。クラスター1に含まれる「makeup\_1, 2, 3」が有意な正の規定因であった。

ピアソン相関分析や重回帰分析の結果は、一般的に化粧の程度を問われると、回答者は、第1クラスターに含まれる化粧行動の施しの程度を思い浮かべていることを示唆している。

Table 5-b 「大学」に行くときの化粧の程度に関する重回帰分析（ステップワイズ法）の結果

従属変数：大学_化粧		
説明変数：makeup_1～makeup_9		
標準化偏回帰係数		
makeup_1	.392	$p = .001$
makeup_3	.283	$p = .001$
makeup_2	.226	$p = .001$
	$R^2 = .530$	$p = .001$

ステップワイズ法：投入基準  $p < .05$ ；除去基準  $p > .10$

#### IV. 考察

本研究の主目的は、顔全体あるいは特定の部分における化粧の程度を緻密に測定し、化粧行動パターンを抽出することであった。女子大学生を対象として「大学」通学時に化粧行動の細目（39項目）を尋ね、クラスター分析や多変量解析によって、化粧行動の基本的構造を探索した。

これらの分析によれば、化粧行動は次の3層から構成される。①外見的な変化を印象づける「アイメイク」を中心とした化粧、②自分の顔の欠点をカバーしたいという化粧、③肌の健康状態などを保つためのケアのまとめり。さらに、②と③は大きなまとめりを成し、ベース補整と解釈できる。クラスター分析と多変量尺度解析という異なる統計的方法で化粧行動に関する①から③のまとめりがともに抽出されたことは、多変量解析で得られた解の *Stress* 値がやや高いとはいえ、この3つのまとめりの安定性を示唆する。

また、小クラスター得点の平均値比較から、①、③、②の順に平均値が高いことが窺えた。これは、化粧行動が単純な外見的顕示を意識した施しから開始され、いったんは基礎補整的な施しに向かい、最終的には下地処理となることを示唆する。しかしながら、この解釈は、あくまでも、平均値の高さに基づいており、当該個人内での化粧行動の進展に関する研究が今後必要とされる。なお、回答者の大半が行っている化粧（「洗顔石鹸（固形・フォーム・泡・パウダー）」、「化粧水」と、少数の回答者しか行っていない化粧（「化粧くずれ・テカリ防止スプレー」、「アイブロウコート」、「つけまつ毛（下用）」、「Tゾーン専用下地」、「ノーズシャドウ」、「リップペンシル」、「唇用美容液」）は本分析に含めなかった。後者の化粧を施している者がどのような化粧行動の進展を経験しているのかに関する事例分析なども有益であろう。

本研究での化粧行動の詳細な測定の試みは、日常的化粧度の測定に関する前研究（板垣・諸井, 2012）の結果に根ざしている。本研究での化粧行動小クラスター得点を用いたピアソン相関分析や重回帰分析によれば、日常的化粧度の一般的測定が外見的な変化を印象づける「アイメイク」を中心とした化粧の有無を反映しており、他の2側面とはあまり関わりがないことが認められた。したがって、前研究のような一般的測定は化粧行動の特定部分を反映していると判断できよう。

以上に述べたように、本研究の目的は一応達成された。しかしながら、本研究で得られた化粧行動の基本的構造に関する普遍性の確認や、化粧行動の進展の解明などに今後取り組むとともに、化粧リスク懸念（板垣・諸井, 2011; 2012）などの化粧に関わる心理学的メカニズムとの関連なども引き続き検討すべきである。

#### 〈付記〉

- (1) 本研究は、第2著者の板垣美穂（生活科学研究科生活デザイン専攻2012年度修了）が第1著者の下で修士論文研究のために収集したデータに基づいている。

- (2) データの統計的解析にあたって、*IBM SPSS Statistics version 20.0.0 for Windows*を使用した。

#### 引用文献

- 板垣美穂・諸井克英 2011 化粧リスク懸念尺度の作成と妥当性の検討 生活科学（同志社女子大学）, 45, 12-19.
- 板垣美穂・諸井克英 2012 女子大学生における化粧リスク懸念と個人的傾性との関係—対異性不安、セルフ・モニタリング、および独自性欲求との関連を中心として— 生活科学（同志社女子大学）, 46, 11-20.